

広島市議会 経済環境観光委員会様

「四国電力伊方原発3号機の  
再稼働反対決議」を求める

# 請願趣旨説明

広島市民グループ：結・広島（代表：原田二三子）

趣旨説明者：哲野イサク

代 表 原田二三子：広島市安芸区矢野町752-29  
主旨説明者 哲野 イサク：広島市西区中広町2-21-22-203

2013年9月26日

# 1. 規制基準施行後再稼働第1号は伊方3号機

今回、伊方原発の再稼働反対決議を求める請願の委員会審査に当たり、趣旨説明の機会を与えてくださり誠にありがとうございます。

現在原子力規制委員会(以下規制委)による、原発再稼働のための規制基準適合性審査が『原子力発電所の新規制基準適合性に係る審査会合』にて急ピッチで進められています。

中でも四国電力伊方原発3号機の審査は突出して進んでおり、早ければこの11月中にも「審査合格」となる勢いです。同3号機が規制基準施行後、再稼働第1号となることは衆目の一致するところです。

しかしながら、規制委自身も言明するとおり、2013年7月8日施行された「規制基準」は「安全基準」ではなく、適合性審査に合格することは当該原発の安全性を保証するものではありません。

## 2. 根源的問題をもつ新規制基準

また新規制基準そのものにも根源的問題があります。

2011年3月の福島第一原発事故を受けて、日本の原発規制行政はその規制方針をそれまでの「原発安全神話」から、「すべての原発は苛酷事故を起こす可能性がある」との国際標準の現実路線に転じました。従って新規制基準では苛酷事故防止とその対策にほとんどの精力が費やされています。

しかしながら、その全体を貫く考え方は、「より大きな苛酷事故を防止するためには、より影響の少ない重大事故はやむを得ない」とするものです。

象徴的には「フィルター付きベント装置の設置義務づけ」でしょう。「压力容器や格納容器の爆発・破裂を防止するためには、放射能を大量に含んだ原子炉内蒸気の大量放出もやむを得ない」とする考え方ですが、私たち一般市民にとって、「大きな犠牲の前には小さな犠牲はやむを得ない」とする考え方は全く誤っているように見えます。

この考え方が現行「規制基準」の根源的問題点です。

### 3. 最新の世界原子力規制思想の潮流

避難計画を含む現行「原子力規制基準」の基本的考え方に対して、世界的に見て最新の原子力規制行政に対する考え方は、「仮に苛酷事故が発生したとしても、一切の被害を市民社会に及ぼすべきではなく、ましてや避難や一時移転があってはならない」とするものです。

しかしながらこのような「原発安全基準はいまだ開発されておらず、世界で稼働中の約430基の原子炉のほとんどはこの安全基準に対応していない。この新安全基準が開発されるまでは、現行原発の運転は見合わせるべきだ」(前米原子力規制委員会・委員長、グレゴリー・ヤツコ氏)

考えてみれば、本来電気を作る道具に過ぎない原発のために、主人公である私たち生活者がビクビクと暮らすのは主客転倒であり、あまつさえそのために広域避難計画を作成し、避難訓練まで実施するのは極めて異様な倒錯現象とみえます。

この点、ヤツコ氏に代表される「新原発安全基準」の考え方は極めて健全と申せましょう。

## 4. 危険な伊方原発3号機

仮に、適合性審査に合格したとしても伊方3号機が危険な原発であることには変わりません。すでに指摘させていただいたように、

1. 同3号炉がプルサーマル炉であること。
2. 「蒸気発生器」というアキレス腱をもつこと。
3. 使用済み核燃料プールに大量の使用済み燃料を無理に貯蔵していること。
4. 南海トラフ自身の震源域、日本最大の巨大活断層「中央構造線」に近接していること。
5. 平常運転時でも大量のトリチウム水を瀬戸内海に放出するなど(2010年度54兆Bq)瀬戸内海を放射能汚染していること。

などに加え、より根本的には四国電力の「コスト最優先」、「安全軽視」の企業文化の存在を指摘しておかねばなりません。

また2012年12月に原子力規制庁が公表したシミュレーションによれば、伊方原発が福島並の苛酷事故を起こした場合、海を隔ててわずか100kmに位置する広島は、1週間で4mSvの予測被曝線量(実効線量)となり、9月5日全部改正された原子力災害対策指針に照らせば、私たちは一時移転しなければなりません。

## 5. 広島市議会最優先の仕事は市民の安全確保

市は国や県の下請け機関ではありません。市民の選挙によって選ばれた広島市議会の最優先の仕事は、広島市民の安全、健康・生命・財産の確保であろうと愚考します。他の誰にも出来ない仕事です。

この視点に立てば、原発問題は単に「エネルギー・経済問題」ではなく、広島市民の「生活権」「生存権」問題であることが明らかになります。特に広島から最も近い原発、伊方原発を考える時、そのことが一層鮮明になります。

伊方原発が苛酷事故を起こすかどうかは、原子力規制委にとっては確率問題に過ぎません。しかし私たちにとっては確率問題ではなく、絶対にあってはならない「絶対課題」です。

どうかこうした視点に立って問題を眺めていただき、広島市議会において、広島からもっとも近い原発、瀬戸内海をわずか100kmしか隔てていない四国電力・伊方原発3号機の再稼働に反対の決議をしていただきたく請願する次第です。残念ながら、もし沈黙を守れば、それは伊方原発3号機の再稼働に賛成とみなされることになりましょう。

ご清聴ありがとうございました。